

1年生の英語科目について

1) 英語の必修科目はベーシック、スタンダード、アドバンストコースに分かれています。

英語の必修科目は、ベーシック、スタンダード、アドバンストコースに分かれており、自分がどのコースになるかは、4月1日午後からのプレイスメントテスト (TOEIC Bridge) の点数と提出された検定試験の結果により決定します。

2) 英語の必修科目の授業は、1年を通して週2回あります。

コース	前 期	後 期
アドバンスト	上級英語 I (発表)、上級英語 I (受容)	上級英語 II (発表)、上級英語 II (受容)
スタンダード	中級英語 I (週 2 回)	中級英語 II (発表)、中級英語 II (受容)
ベーシック	初級英語 I (週 2 回)	初級英語 II (週 2 回)

※ ベーシック、スタンダード、アドバンストの各コースは履修する科目が異なります。

3) 英語の成績は、偏差値のような相対評価で最終成績が決まります。

統一シラバスで開講される「中級英語 I」を除き、同じ名称の科目（初級英語、中級英語、上級英語）については、コースやクラスが異なっても同じ枠組みの中で評価されます。本来、同じ科目であれば、公平に評価する上では、全員一緒に授業をし、同じテキスト、同じ試験を受験することが望ましいのですが、それでは1クラス何百人もの人数になってしまいます。言語科目については、人数は少ないほど効果的であり、またそれぞれの習熟度に合わせた授業を受けなければ、学習効果が期待できません。そのため、松山大学では習熟度別のクラス編成を行い、少人数クラスを実施しています。しかし、本来は全員一緒にすべきところをばらばらに分けて実施しているのですから、英語の習熟度の高い学生も低い学生もクラスごとに別々に評価したのでは不公平さが残ってしまいます。そこで、クラスが複数開講されている同一名称の3科目（初級英語、中級英語、上級英語）については、偏差値のような相対評価を導入しています。ただし、全体を1集団として相対評価してしまうと、上の方のクラスだけが良い成績になってしまいますので、プレイスメントテスト (TOEIC Bridge) の結果に応じて各クラスに基本的な基準点（偏差値で言う真ん中の50）を段階的に設定して、それを中心点として各クラスの中で相対評価を行っています。具体的には各担当教員の最終評価の素点を下の式に当てはめて最終得点（最終成績）としています。

$$\frac{\text{（各学生の最終評価の素点－クラス全員の平均点）}}{\text{クラスの標準偏差}} \times 10 \quad + \quad \text{クラスの基準点}$$

この部分は偏差値の出し方と一緒にです。

ここは偏差値だと50ですが、プレイスメントテストの結果によってクラスごとに60～85までの差をつけています。